

## 視点2

# 「協調性」を育むもの

北山ひと美

(教員)

### 「協調性」と「同調圧力」

「協調性」とは、保育の現場や学校教育の中では、相手の立場を考え、お互いに助け合ったり譲り合ったりしながら同じ目標に向かって力を合わせることでできること、となるのでしょうか。

そういう意味では、集団生活を円滑に行うためには重要な素質であるということになりますが、同時に昨今、特に若い人たちの間で急速に広がりつつある「同調圧力」という言葉も連想してしまいます。

昨年、「LINE」の運営会社と静岡大学が

共同で研究中のネットコミュニケーションを学ぶ授業で、静岡の中学二年のクラスで「悪口はどれ？」という調査をしたところ、〈まじめだね〉〈おとなしいね〉〈天然だね〉〈個性的だね〉〈マイペースだね〉の中で「悪口」と思う言葉は〈個性的だね〉が一番多かったそうです。特に中学生の間では「同調圧力」なるものがあるということが語られます。

私たちの学校（二つの幼稚園、二つの小学校、中学校、高校、大学）は、大正自由教育の流れの中で、子どもたち一人ひとりが主人公である学校をつくらうと、八十三年前、父母が中心になってつくった学校です。その教

北山ひと美（きたやまひとみ）

和光小学校・和光幼稚園 校長。お茶の水女子大学家政学部児童学科卒業後、和光学園の幼稚園、小学校現場で33年間実践を重ね、2014年度から現職。「人間と性」教育研究協議会」本部幹事として、小学生、幼児への性教育実践も進めている。

育目標の中に「個性を尊重する」ことを掲げています。一人ひとり違っていること、異質なものを受け入れること、多様性を尊重することが子どもたちの中に育まれることを目指しています。

それでも昨今のSNSの普及の中では、特に思春期ただ中の子どもたちは、その人間関係の中で「同調圧力」に苦しめられているのかもしれない。

「LINE」を中心にしたSNSの問題は、幼稚園の父母の中にも深刻な影を落とすことがあります。グループの中で疑問に感じることもあっても、それを出していくことができない「同調圧力」を、父母の関係の中でも感じることもあると、私たち教員に相談に来ることもありました。

そのような大人の姿を見て子どもたちは関係性について学習するので、「協調性」を求めることが果たして、助け合ったり譲り合った

りしながら同じ目標に向かっていくことにつながるのか、そうだとしてもその中で一人ひとりがしつかり自分の意見を出し、自分の考えを主張しながら相手のことも受け入れるという、より高度な精神性を持ち得るのか、と思つてしまいます。

むしろ子どもたちには、自分の考えをしつかり持ち、違う考えの人たちと意見を交換しながら多様な考えを受け入れる素地をつくってもらいたい、と願います。

### 幼児期に育みたい、仲間との豊かな関係

私たちの幼稚園では、登園してから十時頃の朝の会の時間までと、昼食後、帰りの会が行われる十三時半頃までの時間を、好きな遊びの時間としています。園舎は、三歳児と五歳児の保育室がある一階も、四歳児の保育室がある二階も、ぐるりと一周できるようになっていて、異年齢の子どもたちが一緒に遊

んでいる姿もあります。

グラウンドでのおにごっこ、サッカーなど保育者と一緒に夢中になることもあれば、体育室で縄跳びの「長持ち競争」がブームになつている時期もありました。五歳児で縫い物に取り組んでいるクラスでは、この時間にテーブルの周りに座つて針を動かす子どもたちがいました。

自分のやりたいことをたっぷりできる時間と空間、それを手助けする保育者がいることは、幼稚園での生活が子どもたちの気持ちを満たしてくれるものになります。

その中では、けんかもあればもめ事も当然ありますが、保育者が子どもたちの気持ちを受けとめ、解きほぐしながら関係を修復していきます。そして、子どもたちと子どもたちをつなぎ合わせるのですが、保育者の大きな役割でもあります。そのためにも、子どもたちが自分で考えること、その考えを出し合い、

話し合う場面を準備することが大切です。

五歳児は、二学期が始まるとリレーの取り組みをします。毎年、十月末の運動会で繰り広げられる五歳児のリレーは圧巻で、四歳児、三歳児の憧れでもあり、五歳児に上がると、いつになったらリレーができるのかと待ち望んでいます。

リレーのやり方、ルールを覚えてしまったら簡単ですが、子どもたちに自由に話し合わせることから取り組みを始めます。

最初はチームの人数が二人、四人、三人、二人、十六人というような分け方（速い人と遅い人をどう組み合わせるかも子どもたちが話し合っていました）で、人数が少ないチームは疲れてくるし、多いチームは走ることができない人が出てしまいます。というのも、いつまでも終わらないので先生が「終わり」と言ったら終わりにして、というのが子どもたちの要望だったからです。トラックの内側

を走る人がいても誰も気にしない、ということもありません。

終わるたびに話し合い、どうして青チームは疲れて走れなくなったんだろう、面白くなくなってやめてしまう人がいたのはどうしてなんだろう、というようなことを一つ一つ話し合い、子どもたちが答えを見つけていきます。

走るのが得意な子どももいれば、得意でない、あるいは好きではない子どももいます。リレーの形が出来上がってくると、「○○が遅いから負けた」というような言葉も子どもたちから出てきます。小学生なら、五十メートル走のタイムを計り、チーム編成を考えるところですが、幼児は何度も何度もやってみて「速い人」と「遅い人」を組み合わせることに、さらに一人ひとりの性格も考えながら「○○は一番目だとドキドキするから二番目にしてあげて」というような話し合いをしてチーム

編成をしていきます。

リレーという集団競技は、幼児の生活の中では最も「協調性」が求められるものかもしれませんが、子どもたち一人ひとりが自分はどうしたいのかを考え、それを出し合いながら、みんなで楽しめる競技にするためにはどうしたらいいか、を考え始めます。保育者が「みんなで楽しめるようにしよう」と言わなくても、みんなが楽しめなければ自分も楽しくない、ということ、日々の生活の中で実感しているからです。

そこには、自分を抑えて周りの人の考えに合わせなければ、という「同調圧力」なるものはありません。

日々の園生活の中での仲間との豊かな関係が、みんなが楽しくなければ自分も楽しくないという感覚を育て、共に力を合わせて生活をつくっていくという「協調性」につながっていくのだと思います。